

## おわりに

セオリー（理論、仮説、論）は、腹落ちするなど体感的に理解、納得できていないといざという時には役に立たない。自身にフィットする仕事のセオリーは、自身の経験を内省（リフレクション）して自分で見出すしかない。実践の中で、先人、諸先輩から教えていただきながら身につけた仕事の基本に関する私的なセオリーを僭越ながら本書に記した。地味でガラパゴスチックに映るかもしれない。しかし、流行り廃りはない。基本とはそういうものだと筆者は認識している。本書をヒントに、腹落ちする、自身にフィットする仕事のセオリーを、1人でも多くの読者に確立していただければ幸いである。

仕事の基本は業績の下振れに歯止めをかけ、戦略を実行するという重要な役割を担う。しかし、業種・業態、組織、人によって固有性（特殊性）が強く、実証研究に乏しい。また、「仕事の基本の構成要素をいかに組み合わせれば、今この窮地を乗り越えられるか」など、すなわち最適化に向けた統合は発展の途上にある。実証研究、統合に関する研究は今後の課題である。

本書の上梓は、加藤篤士道さん（公益財団法人日本生産性本部 主席経営コンサルタント）の発案ならびに適切なリードのおかげである。中央経済社の坂部秀治執行役員には執筆に粘り強く伴走いただきながら、適宜、的を射たフィードバックを賜った。実践オンリーの筆者が実証研究の重要性、意義に気づいたのは、井上善海先生（東洋大学教授）、中原淳先生（東京大学准教授）のおかげである。公益財団法人日本生産性本部の角田信之常務理事、大川幸弘執行役員、野沢清経営開発部長、重野俊哉ヘルスケアマネジメントセンター部長、会田知広さん、他職員の皆さんからは日々ご高配を賜っている。お名前は掲載できないが、多くの実務家から実践や熟慮の場を与えていただいている。いずれの皆さまに対しても心から感謝の意を伝えたい。

最後に妻・孝子、息子・翔、また父・昭男、母・節子へ、本当にありがとう。